

《視能学エキスパート》 視能訓練学

公益社団法人 日本視能訓練士協会 シリーズ監修
若山暁美, 長谷部佳世子, 松本富美子, 保沢こずえ, 梅田千賀子 編

本書は視能学エキスパートシリーズの一冊として出版された、日本視能訓練士協会による視能訓練士のための実用書である。検査や光学・眼鏡に関する書籍は多数出版されているので、“視能訓練”にスポットを当てた本書はシリーズの最高峰として編集されたものに相違ない。

小児眼科や弱視斜視を専門とする眼科医にとって、日々の診療に視能訓練士による詳細かつ的確な検査が不可欠である。われわれの施設では、一人ひとりの患児がよりよい視力と両眼視機能を獲得し維持していけるように、手術治療や訓練について医師同士、視能訓練士共に意見を交わして進めていくのが常である。しかし多くの眼科診療の場では、理想的な環境で診療に従事できる者は少なく、医師は外来や手術に、視能訓練士は新しいさまざまな検査に追われ、視能訓練について十分に検討できる時間を持っていないのか。本書をひもとくことによって、視能訓練士のみならず眼科医も、初心に戻って視能訓練の分野を学び、実践的な知識を得ることが可能であると思う。もちろん、弱視斜視の指導者がいない施設の視能訓練士にとっては、検査や訓練の方法について症例を数多く挙げて具体的に解説している本書が大変に役立つことであろう。

本書を開いて最初に目に飛び込んでくるのは、懐かしい弓削経一先生の名著『視能矯正——理論と実際』の文字である。わが国の視能矯正の開祖の理念を受け継ぎ、さらに新しい概念や科学的根拠を加えて本分野を発展させたいという編集者の思いが伝わってきた。第1部の視能矯正の歴史の章は、若い視能訓練士にもぜひ目を通していただきたい。次章から視覚の発達、視覚生理学、視覚認知学の基礎がわかりやすく記載されており、科学的な探求心を養い、理論を理解した上で訓練に取り組むべきであるという根本的な理念が示されている。検査の章では、入力系、統合系、出力系に分けて、弱視斜視患者に対して必要不可欠な検査の方法が詳しく解説されており、“検査のポイント”のコラムを見ると、さらに実践的なアドバイスが受けられるように工夫されている。指導者がそばで指示を出しているような構成となっており、どのように検査を進め、どう記載するかの子細は、現場の指導者（書き手）の流儀が反映されていると思う。さらに臨床症例として小児、成人に起こるさまざまな内斜視、外斜視に対し、検査の結果と注意点が解説されており大変参

考になる。しかし、すべて入力系、統合系、出力系の順に記述されているが、実際には視力検査・屈折検査から始めることはないので、本来の検査手順とは異なることを明記したほうがよいと思う。先天内斜視の小児例にも就学までプリズム治療を継続する例をはじめ、全編を通して臨床症例は書き手の流儀に沿っていることも明記されたい。また検査を進める上で、視能訓練士であっても忘れてはならない重要なことは、医師と連携して器質疾患を早期発見することであると思う。検査の際に器質疾患が疑われる症例の解説も改訂の際にはぜひ含めていただきたい。

第2部は弱視治療（視能訓練）である。近年、EBMに基づく治療をめざしたPEDIG（北米の小児眼科医グループ）による多施設共同前向き研究の結果を受けて、治療のスタンダードが提示された。本邦では依然として施設間で治療方針に多少の差異はあるが、重要なことは眼鏡や訓練のコンプライアンスを把握し、治療経過を評価して新たな方針を立てることである。特に微小斜視を鑑別して不同視弱視の訓練を進める症例の提示など、現場で遭遇する頻度が高い弱視に対する訓練のエッセンスが組み込まれている。

第3部には、いよいよ斜視の視能訓練について、内斜視、間欠性外斜視、さらには後天眼球運動障害に分けて詳しく記述されており、本書の真骨頂がいかんなく発揮されている。視能訓練士には必須の知識が満載で、実践的な解説が秀逸である。われわれ眼科医は、視能訓練の適応と方法を十分に理解し、内斜視に対するプリズム療法、間欠性外斜視の抑制除去、輻湊、融像訓練など、手術と組み合わせで最良の両眼視機能を獲得し維持していけるように個々の治療計画を立てるべきである。

本書の特徴として、視能訓練以外の手術治療を概説した第4部は必要最小限にとどめられている。2015年から本邦にも導入された斜視のボツリヌス毒素注射についてはほとんど触れられていないが、今後はボツリヌス療法と視能訓練をどう組み合わせっていくか、興味深い課題と考える。

国立成育医療研究センター眼科
仁科幸子

B5・頁440 2018年03月
定価：本体15,000円＋税
[ISBN978-4-260-03223-0] 医学書院刊